教壇に別れ　定年５教授

長年の間、学生の指導と真理の探究に情熱を注いでこられた５人の先生方が定年を迎え、卒業生と時を同じくしてキャンパスを去る。４人の先生に本学の思い出や学生へのメッセージを寄せていただいた。

学んだ「社会知性」活かそう

経済学部教授　町田　俊彦

卒業おめでとうございます。大半の卒業生は4月以降、職業人になるかと思います。実社会で仕事を行うことに対する期待と不安が相半ばしていることでしょう。

私は大学教員を43年間務めましたが、いつからか卒業生に対して「がんばってください」と励ますことができなくなりました。長時間労働に追われて体をこわし、家庭生活との両立が困難になった卒業生が出てきたからです。

最近は労働報酬について「成果主義」が強まり、「成果」は個々人の努力の関数であるとの「刷り込み」が行われています。

しかし「成果」を決める最大の要因は、国・自治体の政策や経営者の経営戦略です。賃金の大きさだけではなく、自由に使える時間などを含めて「豊か」になろうとしたら、「市民」として国・自治体の政策に関心を持ち、少なくとも国政選挙・地方選挙で投票することが必要です。この点で「社会知性」を教育理念に掲げる専修大学で学んだことを活かしてほしいと願っています。

あえて「一人になろう！」

法学部教授　佐藤　恭三

学窓を旅立つ諸君に、はなむけの一言。人との交わり・関わりの大切さがまことしやかに喧伝され、それ自体があたかも真・善・美かのように巷間に流布しています。しかし、僕はあえて「一人になろう！」というアンチテーゼを君たちに贈ります。

本当の意味で他者を理解し、他者に優しくなるには、自分を他者（あるいは社会）との関係で見つめるという行為、つまり、自己の相対化が前提になります。そして、自己相対化の最初の扉が「一人になること」。例えば、一人で公園のベンチに仰向けになって空を見上げるとか、ベッドに寝そべって天井を眺めることなのです。

そこから出てくる想念に思いを馳せると、自分の弱さや卑小さ、つまり、ヤバさに気づかされるはずです。

こうした自己愛・自己憐憫からの認識上の離脱というプロセスがあって、初めて、次の扉にたどり着けるのです。と同時に、自己相対化が他者への理解と優しさに転化するのを、身をもって感得することができるはずです。

若人よ！　チバリヨ！（がんばれ）

「戦争をしない責任」自覚を

文学部教授　新井　勝紘

統一ドイツの初代大統領だったヴァイツゼッカー氏は、第二次世界大戦から40年の1985年に、次のような演説をし、大きな反響を呼んだ。

「過去に目を閉ざす者は、現在に対しても盲目となる」

歴史を直視する重要性を説いた含蓄のある言葉である。歴史をありのままにとらえることが、いかに大事か。30年後の現代でも重い意味をもつ。

ふりかえって、今年日本は戦後70年を迎えた。この間、なんとか平和を守り続けてきた。今、その平和路線に注意信号が灯ろうとしている。国内外の多くの戦争犠牲者の命にかえて、戦争は決して繰り返してはならないことを、私たちは学んできた。

これから学窓を巣立つ諸君が、一人の人間として、社会人として、家庭人として、「戦時」などという時代に遭遇することなく、充実した生き方ができることを一人の歴史研究者として願わずにはいられない。そうならないためには、君たちにも責任があることを自覚して、とびたってほしい。

ユーモアと笑い　忘れないで

文学部教授　永瀬　治郎

「後悔を先に立たせて後から見れば、杖をついたり、転んだり」

これは古今亭志ん生の落語のマクラでよく使われていたフレーズです。専修大学に37年間お世話になった私にとって、まったくその通りだと実感できるフレーズです。

70年間生きていますと、さまざまなことを経験できたはずですが、後悔することばかりが記憶に残っています。卒業するみなさんはこれからが人生のメイン・イベントです。

失敗を恐れず、生きることに前向きで、楽天的に生きてください。失敗して後悔することがあっても、その失敗を反省し、それを糧として、一回限りの人生ですから、前をしっかり向いて、なにごとも楽天的に考えるほうがはるかに楽しい人生になるはずです。

豊かな人生を過ごすために、ユーモアと笑いを忘れないでください。

定年退職

▽経済学部
町田俊彦教授＝在職19年。主な担当「財政学」

▽法学部
佐藤恭三教授＝在職33年。主な担当「英語」

▽経営学部
三邊ユリ子教授＝在職37年。主な担当「経営数学基礎演習」

▽文学部
新井勝紘教授＝在職14年。主な担当「日本近代民衆史」
永瀬治郎教授＝在職37年。主な担当「ことばと社会」

依願退職

3月31日付
藤田由紀子法学部教授＝在職14年
藤岡新治人間科学部教授＝在職29年

一生を決めた「五日市憲法」との出会い

新井教授　最終講義

▲ゼミ生に囲まれる新井教授

研究活動　約半世紀

「歴史の地下水を汲み上げて、将来を見ていかねばならない」

近・現代史担当の新井勝紘教授は1月24日、生田キャンパスでの最終講義で約半世紀の研究活動を振り返り、語りかけた。会場にはゼミ生、卒業生、教職員、新井教授の研究仲間ら約150人が集まった。

テーマは「歴史研究　自分史　資史料探索の成否は何が決め手か」。この日のために準備した13枚のレジュメを基に1時間半にわたって最後の講義を行った。

東京経済大学の学生時代、民衆思想史が専門の色川大吉教授の「地下水論文」に衝撃を受けた新井教授。1968年、東京・西多摩郡五日市町（現・あきる野市）深沢家での色川ゼミ土蔵調査で、人権感覚豊かな私擬憲法「五日市憲法」（明治14〔1881〕年起草）を最初に手にするという、運命的な出会いをした。「私の一生を決めた」と、自由民権運動の研究に情熱をかけるきっかけを語った。

その後も訪れた数々の運命的な発見や出会いを紹介。「憲法草稿評林」（明治13〔1880〕年ごろ起草）では鮮やかな分析をみせるなど、郷土史研究家として活躍。

2001年に専大で教壇に立ってからは、軍事郵便の解読から戦争を考えるというゼミ活動を進めてきた。この日は収集した膨大な軍事郵便の一端を紹介した。

2014年度　専修大学卒業者数

学部	学科・専攻		一部	二部	計
経済	経済		528	92	825
	国際経済		205	—	
法	法律		586	118	862
	政治		158	—	
経営	経営		554	—	554
商	マーケティング		499	91	833
	会計		243	—	
文	日本語日本文	日本語学	6	—	692
		日本文学文化	2	—	
	日本語		63	—	
	日本文学文化		126	—	
	英語英米文		153	—	
	人文	哲学人間学	3	—	
		歴史学	4	—	
		環境地理学	0	—	
		社会学	4	—	
	哲		58	—	
	歴史		119	—	
	環境地理		60	—	
	人文・ジャーナリズム		94	—	
	心理		0	—	
ネットワーク情報	ネットワーク情報		238	—	238
人間科	心理		59	—	175
	社会		116	—	
合計			3878	301	4179

※学期末卒業者を含みます。

2014年度　大学院修了者数

研究科	専攻（コース）	修士課程	博士後期課程	計
経済学	経済学（ファイナンス以外）	18	—	20
	経済学（ファイナンス）	0	—	
	経済学	—	2	
法学	民事法学	—	1	6
	公法学	—	0	
	法学	5	—	
文学	日本語日本文学	5	2	31
	英語英米文学	1	0	
	哲学	3	0	
	歴史学	3	3	
	地理学	2	0	
	社会学	1	1	
	心理学	10	0	
経営学	経営学（経営学）	10	0	12
	経営学（情報管理）	2	0	
商学	商学（アカデミック）	3	0	20
	商学（ビジネス）	2		
	会計学（アカデミック）	1	0	
	会計学（ビジネス）	14		
合計		80	9	89

※特例措置修了者を含みます。
※上記修了者の他に、学位規程第14条第１項のただし書きによる学位取得者が１人います。

2014年度　専門職学位課程修了者数

法務研究科	法務専攻	20